

本を選ぶ

NO.433 2021年(令和3年)6月20日

●発行／ライブラリー・アド・サービス

<http://www.las2005.com>

本社 〒114-0002 東京都北区王子 4-23-4 TEL=03-6908-4643

- <ろん・ぼわん>電子版
- 選書の法則:S.R. ランガナタンからの187のメッセージ(16)
- 帰ってきた図書館員(61)
- 「今しかできないことを」
- 彩り・・・目が不自由ということ・・・

●●●●●ろん・ぼわん●●●●●

電子版

新聞紙面が一部カラー化されてから、広告頁は雑誌並のカラー版が増えた。出版物の広告欄もカラー広告を時折見掛けるようになった。朝刊の一面下に、毎日ではないが小枠で囲まれた出版物広告が8連横並びになっている。普段はモノクロの文字だけの広告だが、10数年前だったか児童書が並ぶカラー広告が一面に登場して、話題になった。最近はそのが普通になって、いよいよそんな時代になったのだ。

朝日、読売、毎日の三大紙の新聞発行部数はこの数十年、とりわけウェブやスマートフォンの普及が進んでからは、半減に近い状況となっている。世の中の動きにやや遅れて、新聞社もウェブ化に本腰を入れたものの、当初は朝夕に出す紙の新聞発行に根強いこだわりがあったように思える。この電子版(デジタル版)に一番熱心に取り組んだ日本経済新聞社は、就活世代を電子版読者に取り込もうとテレビCMを打ち続けた。

新聞離れは随分前から言われてきたので、日経以外の各新聞社もあの手この手で対応を図ってきた。購読料を電子版とセットにして割引したり、電子版のみの購読を可能にしてみたものの、なにしる40歳代前半までの世代はほぼ新聞を読まな

い。固定電話をもたなくなったのと同様、新聞の購読もしない。ニュースはスマートフォンやSNSで、という世代だ。

さらに、コロナ禍の昨年以降、こうした全国紙の凋落ぶりはかなり深刻になってきた。朝日は1993年に820万部だったのが、昨年8月には500万部割れとなったらしい。収支の悪化により、ついに27年ぶりの値上げに踏み切った。朝夕刊の月ぎめ購読料を7月から363円引き上げて、4400円に改定する。既に読売は数年前に同じ購読料に値上げしてしていたので、追随したと思われる。その読売も、20年前には1000万部を突破して発行部数世界一と自慢していたものの、いまや800万部を割ってしまったようだ。

一方、毎日新聞は日本で一番古い日刊紙と言われているが、今年初めに資本金を40億円減資して1億円にして中小企業になった、というニュースが目をついた。資本金が1億円であれば、税金が安くなるからだ。なりふり構ってはいは生き残れない、そんな危機感すら伝わって来る。

新聞がデジタル化を始めた頃、従来の紙面と読み比べてみた。モニターで読む新聞は、長年の新聞読者にとっては読みにくい。縦組みではなく横組みになり、さらに記事毎の紙面なので一覽性に欠けるので全体が掴みにくい。こちらは新聞との長年の付き合いで、先ずは見出しを眺め回すクセがある。見出しはそれなりに工夫され、新聞社毎の違いがその扱いに表れるが、そこに新聞社としての姿勢が明瞭に見て取れるからだ。(埜村 太郎)

選書の法則：

S. R. ランガナタンからの187のメッセージ (16)

吉植 庄栄

16. 第三法則と選書・上

『図書館選書論第2版』の内容を、ランガナタンがよく使った架空の対談方式で紹介する。2018年に第二法則・下まで書き中断していたが第三法則から再開する。

【登場人物】

○ランガナタン：図書館界のビッグスター、S. R. ランガナタン (1892-1972) 先生。

○第三法則くん：ランガナタンの著作『図書館学の五法則』に出てくる「いずれの図書にもすべて、その読者を (Every book its reader)」という3番目の法則。原作に倣ってしゃべります！

○3年以上ぶりに帰って来ました。

ランガナタン (以下「ラ」): 皆さん、ご無沙汰でした。不器用な筆者さんのせいでしばらくお休みしていましたが、引き続きよろしく願いいたします。

第三法則くん (以下「三」): よろしく願いします。

ラ: それにしても、君の出番がなかなか来なくてやきもきしたねえ。

三: もう日の目を見ないかと思っていました。

ラ: そもそも君ってさ……影薄いよね。

三: 先生! やめてくださいよ! それ結構気にしてるんですから。

ラ: 大体『図書館学の五法則』で人気あるのが第五法則くんだよな。

三: 「成長する有機体」とかって、彼は夢と希望にあふれていますからね。

ラ: で、次には第四法則くんかな、利用者の時間を節約するって、図書館に限らなくて良いよね。

三: アメリカの新解釈で彼は新・第一法則に任じられていますし。

ラ: そういう君は4番目に転落! 敬意を持たれた第五法則くんが定位置をキープしたから、実質重要度ビリ…… (この新解釈とは、OCLCが『図書館学の五法則』の順番を現代の観点で並べなおし再解釈したもの。時間に追われている現代は、第四法則が新・第一法則であるべきである一方、第五法則は順番も解釈も変える必要はない、と述べている。第三法則は、新・第四法則へと順位を下げられている。興味を持った方は、是非、吉植庄栄・

“E1611 - 時代は変わり順序も変わる: 『図書館学の五法則』再解釈の試み”. カレントアウェアネス-E. 2014, no. 267.

<http://current.ndl.go.jp/e1611>, (参照 2021-06-06). を読

んで欲しい。)

三: やっと出番が来たと思ったら、散々いじりますよね。ひどいなあ。

ラ: いやあ、すまん。このように君をいじり倒したのも、影が薄くなりがちな君の魅力を改めてみんなに伝えたいがための前提なのだよ。

○第三法則くんのこと知ってる?

ラ: さてそれでは第三法則くんを、改めて紹介しよう。「いずれの図書にもすべて、その読者を」だ。

三: 第二法則くんの「いずれの読者にもすべて、その人の図書を」と対になっているので、双子の姉妹みたいなもんです。あっちが先のせいか、やはり私は影が薄くなっちゃう。

ラ: でも君は重要なんだよ。第二法則くんのただの裏法則ではないのだ。まずは君の具体的な主張を列挙してみよう。(1) 開架式 (Open access) (2) 書棚の整理と工夫 (3) 目録 (4) レファレンス・サービス (5) 広報活動 (6) その他……といったところだな。

三: まず前提なんですけど、図書って自分で歩いて「やあ!」とか言って利用者に向って行くことはできないんですよ。(脳内で図書の方から呼んでると感じる人も居るかも、ちょっと怖いけど。)

ラ: 実際は、利用者に見つけてもらうということになる。

三: そんな訳で前提として書棚が一覧的にディスプレイされていないと、発見してもらえる可能性はぐんと下がります。

ラ: 『図書館学の五法則』を書いた1931年ころはまだ閉架式 (注: 書庫にある図書を利用者は図書館員に出納してもらう方式) が多かった。

三: そうですね、現在は大分私の主張が実現したと言えます。

ラ: 面白いのは、この開架式って Open access の訳なんだよね。

三: 現代だと、オープンアクセスといたら、論文

のインターネット無料公開の意味がありますね。

ラ：図書が書庫から開架式の書棚に配置され、利用者が自由に選べるようになったことと本質的には同じだよ。

三：ですので地味ですが、私って結構いろんなところで仕事してるんですよ。

ラ：涙ぐましいのお。裏方好きな多くの図書館員に共感してもらえそう。「私も第三法則くんみたいになりたい！」とか言われたいよね。

三：「成長する有機体！（目がキラキラ）」が多いですよ、ちえつ。

ラ：（話変えよう汗）そのほかの、書棚の整理工夫、目録、レファレンス・サービス、広報活動なんかも全て利用者に自分の図書を発見してもらうための仕組みだな。

三：そもそも書棚に分かりやすく並んでないと見つけにくいし、目録が今はOPACですが、検索しやすければそれだけ発見してもらえます。また、レファレンス担当の司書さんに相談ができることで可能性は上がります。

ラ：そういえば広報は何をするのかな？

三：よくあるのが、テーマ展示ですね。イベントや季節に合ったテーマで、図書を展示するのです。利用者がよく通るところに設置すると、出会いの可能性が上がります。このように努力と工夫で、利用者と図書の出会いの可能性を上げましょう！というのが私の主張なんです。

ラ：欲を言うと、書棚に眠っている図書が使われる機会をより増やしたいよね。さらに言うと普段図書館に興味を持たない人にもアピールして、図書館に来させて自分の図書と出会うところまでやりたいよね。この点にも留意して広報を広域的に実施しないとね。

三：そうなんです。館内展示で満足してないで、より多くの人に気づいてもらいたいです。でも、（図書館の上の）偉い人にはそれがわからんです。

○で、第三法則くんは選書をどう考えるの？

ラ：さて、第三法則くんをおさらいしたので、次は本題の選書に行こう！第二法則くんに対して、第三法則くんは逆なだけで選書の主張も基本的に同じ

だ。でも第三法則くんの主張は、第二法則くんのそれよりも広いんだよ。

三：？？？詳しく教えて下さい。

ラ：まず第二法則くんの主張は、利用者が欲しい図書を選ぶことだ。

三：そうでした。利用者が読みたい図書を、直接的な要求だろうが潜在的だろうが選書する、という話でしたよね。で、私は？

ラ：可能性じゃよ。利用者に求められる可能性が高い図書を選ぶのだ。

三：さっきも見つけてもらう「可能性」を上げるために図書館員は色々な工夫をする、という話でしたよね。

ラ：そうそう。第三法則くんは「利用者に必要とされる可能性」が高い図書を選べ、という主張が独特。第二法則くんは利用者の御用聞きみたいだけど、第三法則くんは可能性の視点で「類推」するのだ。

三：つまり「言われたものを選ぶ」のではなく「欲しそうなものを選ぶ」ということですね。なるほど。

ラ：そうじゃ。的確に類推するために図書館員は、様々なことに関心を持ち学ぶ必要がある。

三：分かりました、具体的にはどうすると良いのでしょうか？

ラ：(1) 利用者の生の声を知る機会を増やす (2) レファレンス事例の記録を読む (3) 近隣住民の主に従事している仕事を知る (3) 予定されている地域や国のイベント・行事について知る (4) 地域の読書会とか文藝サークル等を見てイメージする・・・こんな感じかな！？

三：先生！ 第二法則くんとちょっと被ってませんか？「秘めたる思い」を知るくんだりと似てませんか！？

ラ：それはそうだよ。君ら表裏一体だし。でも、やはり可能性を類推するところが、君の独特なところだと思う。

三：そうなんですかね、もうちょっと詳しく知りたいなあ。

ラ：次回以降、それを更に掘り下げていこう。

三：はい、楽しみにしています。

（よしうえ しょうえい：盛岡大学文学部）

帰ってきた図書館員 (61)

—公共図書館の本来の使命とは—

山下 青葉

この原稿を書いている五月上旬現在、四都道府県に非常事態宣言が出ており、その他まん延防止等重点措置を適用される自治体も増えつつある。

私自身も昨年の今頃、コロナ禍が続く中で職場でトラブルが絶えない状態になり、体調を崩し、休職までには至らなかったものの、かなりそれに近い状態になり、つらい日々を送る事となった。

年度が変わり、職場は昨年同様一部閉館ということで業務を行っているが、人的な問題などが改善されたため、昨年のように体調が不良になることも今のところなく、落ち着いて過ごしている。

昨年の同時期にこの欄で、9年間続けていた老人ホームでの紙芝居読み聞かせボランティアの活動について振り返り、一日も早く感染症騒ぎが終息して、また楽しい時間が持てるようにと願っていたのだが、結局活動が復活することはなく、この状況では先への期待が全く持てず、寂しい限りである。

現在、書架スペースには入っていただけにならない、昔の閉架書庫状態に戻ってしまった中で、利用者の方から「改めて直接本に触れて貸出を受けられることのありがたみを感じた」との声をたくさんいただいている。いわゆる市民からの投書で「図書館のような不要不急の施設は閉めるべき」という声もあるが、東日本大震災の時にもあったように、まさに「人はパンのみにて生きるにあらず」で、東日本大震災の時に、復旧した映画館で映画を見終わった人々が「何だかほっとした」「元気が出た」と一様に安堵の表情で言っていたのと同様なことが、今回のコロナ禍でもあると思うのだ。

公共図書館という立場上、いわゆる役所の対策委員会での決定を受けて動かねばならず、思うに任せないこともあるが、このコロナ禍の中でもできる限り、利用者の方々に図書館資料を届けられるようにしていきたいと思っている。

さて、体調のこともあり、この一年くらいあまりボリュームのある本を読めずにいたのだが、この度以前から気になっていた『公共図書館が消滅する日』（薬師院仁志・薬師院はるみ著／牧野出版／2020）

を読むことができた。

内容は現在公共図書館が「読書通帳」の作成やぬいぐるみお泊り会などの行事に力を入れ図書館の利用者増を図っているが、それらを「国民の文化と発展に寄与」という図書館法の理念ではなく、商業主義的な図書館の生き残りをかけた自助努力ととらえ、このような状況になった原因を、戦後の図書館法改正や図書館事業基本法（図書館事業振興法）の制定を当時の図書館関係者が阻止してしまったことにあると、歴史を振り返り検証しているものである。

当時の図書館関係者がこれら国からの助力提案を阻止したのは、戦前の経験から、「お上からの」ものに対する拒絶反応が大きく、内容の検証をすることなく、受け入れることができなかったことにある。そこで彼らがあるべき姿としたのは、「中小レポート」や『市民の図書館』で示され、その内容を体現していた日野市立図書館や置戸町立図書館のような「国の力に頼らない」中小図書館の活動であった。

しかし、歴史を検証してみると、これらの図書館が図書館史に残るような活動をする事ができたのは、町の有力者が図書館活動に熱心だった（日野）、農村モデル図書館となったところにダム建設が重なり町が活気づいていたから（置戸）と、我々が従来聞き及んでいたような「中小図書館こそ公共図書館の全て」を体現するような物語とは全く関係がなかったということなのだ。

著者は具体的な問題解決への方策を具体的に示すことはせず、公共図書館が本来の使命に立ち返り、目指すべき方向を見据え直すことを提言している。

かつて、図書館学を学ぶ中で心を動かされた事柄のある意味での真相を、このようなかたちで知らされたのは残念な気持ちだったが、自身の勤務する図書館での行事に対するあり方に常々疑問を感じていたところもあり、コロナ禍で行事ができなくなった今、図書館のあり方を再度考え直す機会なのではと改めて思ったのであった。図書館のあり方を再度考え直す機会なのではと改めて思ったのであった。

（やました あおば：図書館員）

「今しかできないことを」

溝上 牧子

自由に旅行などできるような状態ではないという日々が続いている。人生の計画なんて、立てていても思い通りにはいかないものだとつくづく思う。だからこそ、今しかできないことがあったのなら思い切ってやってみたいと最近強く思うようになった。

人は環境や、その時の状況によって変化してゆく生き物だと思う。友人がまさにそれであった。絵描きの彼女は学校を卒業後、出版社に勤めていたが、1～2年で辞めて美大に行き日本画家になった。それだけでは食べていけないので美容や、調理の専門学校で美術を教える講師をしているが、ある日、卒業した美大の制度に応募して、とうとう念願のフランスでの1年間の美術研修のための住む場所と、そのためのまとまったお金を手にいれた。それを手にパリへ飛んだのは2013年の春のことだ。

それまでの生活は毎日忙しく、家では調理もほとんどしなかった彼女は、食事は買って来たものか、外食だったという。そんなわけで日本の賃貸住宅を出る時、不動産屋が新品ピカピカのガスレンジを見て使っていないのか…?と驚いたという。「はい!全然使ってません!」と友人は笑ってそう言ったそう。

今後1年、住む場所はあっても、仕事の収入はとだえる。支給された100万以外の収入はない。パリまでの往復航空券や絵を描くため地方に出る交通費、絵を描く材料、食費、その他諸々の雑費もそれで賄うつもりだったようだ。フランスはもちろん安いものもあるのだが、外食は思った以上に高い。もちろん絵を描く紙やその他の画材などもそんなに安くないのだ。なるべくもらったお金の範囲内で生活したいと考えた結果、彼女は自炊を始めた。そしてほしくて高いものはアクセサリ、袋類、服…となんでも手作りするようになった。買うのは簡単だがお金はかかるし、なかなかびったりのものに巡り合わないものだ。

色々やってみた結果、彼女はなんでも器用にこ

なし、様々なものを手間さえいとわなければ、安い材料で希望のものを作ることが出来ることに気づいたのである。絵を描くために来たので、今まで毎日通ってこなしてきた仕事はない。絵のためにたっぷり与えられた自由な時間。その時間の一部を、手間をかけて暮らす生活に静かにシフトしていったのである。そして帰国後もその生活習慣は残り、現在に至っている。今や田舎に住む農家のおばちゃんのようにかいがいしく、庭の梅の木に実がなればシロップや梅干を作り、安い果物が手に入ればジャムを作る。お菓子が食べたければ自ら焼き、電化製品以外は何でも手作りしてしまう。やむなく始めたこととはいえ、環境によって自分の開かれていなかった面が開花したとっていいだろう。

彼女のフランス行きは私にも多少の影響を与えた。海外に行きたい気持ちはあったが、思い切って行けなかったし、フランスにはあまり興味がなかった。だが、現地に暮らす友人がいるフランスは面白そうだ。旅のみでない実生活にふれられる機会はそう多くない。それもたった一年以内という期間限定…そういう規制が、かえて今まで動かなかった私の心を動かしたのであった。その時点で貯金は0だった。先々のことを考えずに、あの時、よく行ってこられたものだ。

今も時々その時のことを鮮明に思い出すが、得難い経験だった。今後全ての今しかできないことに飛び込むことは出来ないかもしれない。けれど、もしもこれだけは叶えたい、実行したいということがあれば、「えいっ!」と飛び込める自分でいたい。人生の中で節目節目にある岐路だけでなく、目の前に立ち現れた出来事のなにをどう選び取っていくか。そういう一つ一つが自分の人生を作っていくのではないかと思う。今この瞬間だってそう。漫然と生きていると時々自分を見失ってしまいそうになる。

(みぞかみ まきこ：朔北社)

彩り・・・目が不自由ということ・・・

神部 京

日常の中で、視覚から得られる情報の多さ。見えているものが、この世界を形取っているものの全てではなく、自分自身が認識する世界の一つの情報である。では、視覚で世界を見ることが出来ない場合、視覚で捉えている世界との違いとはどのようなものなのか。本を通して見ていきたい。

『6 この点～点字を発明したルイ・ブライユのおはなし～』（ジェン・ブライアント文 / ボリス・クリコフ絵 / 日当陽子訳 / 岩崎書店 / 2017）

ルイ・ブライユは3歳の時に馬具職人であった父親の工房で事故に遭い、片目を傷つけてしまい、その後感染症によって両目の視力を失った。けれども、好奇心旺盛なルイは家族の支援や住んでいた村の神父からの助言があり、村の学校に通えることとなった。その後パリにある全寮制の王立盲学校へ進学。ルイは目が見えない自分でも読むことができる本を望んでいた。この頃盲学校では凸文字（浮き出し文字）を使っていたが、それでは1冊の本を読むのに数ヶ月もかかり、自分自身で文字を書くことはできなかった。ある日、退役軍人が暗闇の中で伝言を送るための「夜間文字」を考案。それは12個の点を使って文字を作る方法だった。軍人は、この文字が目の不自由な人の役にも立つのではないかと学校に紹介した。ルイはこの文字の改良に熱心に取り組み、やがて6個の点を使った文字を発明し、目が不自由な子どもたちのために本を作り続けた。ブライユ点字は日本にも渡り、国内で日本点字の構想をする上でのヒントとなった。ルイは自身が求めていた学ぶための本を作るための基盤を確立したのだ。

『飛ぶための百歩』（ジュゼッペ・フェスタ作 / 杉本あり訳 / 岩崎書店 / 2019）

14歳のルーチョは2歳になって間もなく、視神経の変性疾患を患い5歳の時には徐々に焦点を合わせる力を失っていった。ルーチョの叔母のベアは、ルーチョが狭い世界にとどまることを懸念し、旅行や山歩きに連れ出した。ルーチョは「目が見えない」

ことで周りから差し伸べられる手をどうしても好きにはなれなかったがベアのことは信頼していた。

中学を卒業したルーチョはアルプス山脈の一部を形成するドロミテ溪谷へベアとやってきた。ルーチョは山小屋で同じ年のキアーラという女の子と出会う。キアーラは始め、目が見えないルーチョに余計な言葉をかけないようにと気詰まりを感じていた。しかしルーチョの陽気な性格によって、2人の気持ちは縮まりキアーラも本当の自分を見てくれるルーチョに心を開くようになる。ルーチョもキアーラの真剣な言葉に、これまで頑なだった誰にも頼りたくないという気持ちに変化が現れた。1年後、ルーチョとキアーラは山で再会する。ルーチョは盲導犬のアストロと高校生活を過ごしている。誰の力も借りず、自分だけで何とかしようと意固地になっていた自分をキアーラが変わるきっかけをくれたのだ。キアーラも本当の自分を言葉にして伝えることで、周囲に理解してもらえるとという安心感を得ていた。お互い置かれた環境の中で抱えていた課題を、当たり前ではないそれぞれの常識がきっかけとなって作用しそれぞれの生き方に変化をもたらした。目が見えないことで原因となったことと、目が見えているからこそ言葉にして伝えないと伝わらない本当の気持ち。お互いが真剣に向き合うことで、それぞれにとっての解決の糸口となったのだと感じた。

『みえるとかみえないとか』（ヨシタケシンスケさく / 伊藤亜沙相談 / アリス館 / 2018）

舞台は宇宙。宇宙飛行士の主人公が様々な星を訪れ、身体的に特徴のある生き物たちと出会いお互いの機能面での違いや、生活の上での利点や出来ないことをお互いに面白がる。身体的機能が異なれば、それに合わせた生活様式や環境が整えられ、日常の世界の様子は適応するようにデザインされたり、捉えることの出来る機能を使って生活が営まれている。自分自身で見ることが出来る世界、見ることが出来ない世界を障害という言葉は使わずに表現している。この絵本は「身体論」を研究している伊藤亜沙さんの著書、『目の見えない人は世界をどう見ているのか』（伊藤亜沙著 / 光文社 / 2015）をもとに、絵本の著書が相談しながら形にした作品である。障害者と健常者との身体的特徴とは何か。どう接す

るのが望ましいのかという疑問から描かれている。

一方、伊藤亜沙さんの著書では、研究者として実際に目が不自由な方との関わりの中から身体的特徴について触れている。人が暮らしの中から得る情報の8割～9割は視覚が担っていると言われていた。その機能が不自由な場合、その人は世界をどのように見ているのか。著者は視覚を遮れば見えない人を体験できるのではないと考えている。目をつぶることは視覚情報の遮断に過ぎず、視覚抜きで成立している世界そのものの見方、体の特徴に意識をおいている。実際に視覚障害の方と接した際、「そっちの世界」はどんな感じ?と投げかけられた時、障害について堅く考えていた自身の感覚をほぐしてくれたと言っている。福祉的な態度からどのように手を差

し伸べようかと考えるだけでなく、個と個という対等な立場で「好奇の目」を持ち、違いに興味を持ち関わりを持つこと。どこか異なる文化などに対する関心と近いものがあるのではないか。その心構えが人と人とお互いを想像するヒントになるように感じた。視覚が不自由であることで、見ることが出来る人が使っていなかった他の身体的感覚機能を使うことができ、世界を捉えることが出来ている。見えることが形作っている世界が全てであると捉えることは時に危ういこともある。捉え違えてしまうこと、わかりきったつもりになってしまうことは多々あるのではないだろうか。視覚機能以外の感覚をも大切に世界を捉えることは、もっと豊かな世界を感じる事なのではないかと感じた。(かんべ みやこ)